



Title	社会学研究科修士論文紹介
Author(s)	
Citation	一橋研究, 3: 112-116
Issue Date	1957-03-27
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/6812
Right	

社会学研究科修士論文紹介

パスカルのキリスト教弁証論

上原ゼミナール

岡 祐 記

パンセの原典について
パスカルの生活とその作品
パスカルのキリスト教弁証論
自然研究について
人間研究について
神について

【要 旨】

この論文の問題点は人間学的認識より神への移行の問題が中心であり、これをもつばらパンセを中心として考察したものであります。しかしこの論文は、問題の解決を意図したのではなく、あくまでも問題呈示にあると言えます。

オ一部原典研究で、パスカルがどのような弁証論を意図していたかを少くともテキスト・クリティークを通して、客観的にあとづけようとしてきました。そしてその結論は、パスカルの弁証論においてまず問題となることは理性的立場と神学的立場との関係が如何に扱われているかという点でした。オ二部はこのような観点からパスカルの生涯と作品とを通観したものであります。オ三部は、パスカルという多面的な人間を把握することの困難を感じつつも一応パンセを中心として見たパスカル像です。

パスカルの思想……それはまさしくアンティノミーによつて進行して行くものであります。実在は無限であり、他方人間の知性自身もまた、無限の衝動を内包するものでした。それは破壊と統合との連続でもあります。慣習の中に埋没されることなくそれを打破していこうとするクリエイティブな人間精神……それをパスカルは心情と呼んでおります。しかしこの心情は神（最高善）を認

識することにおいてはどうか……恐らく、この論文の中心はここにあると思います。私の結びになるかも知れませんが……パスカルの神とは隠れた神であり、暗さの中に存在するものであります。理性は躓きの中でしか知ることが出来なかつたものです。オ三章は以上のような要約で終つております。

ジョン・ロックの 自然法論について

上原ゼミナール

中 村 恒 矩

1. 初期ロックの生活と思索
2. 自然法認識に関するロックの論証とその問題点
3. 自然法の拘束力に関するロックの論証とその問題点

十九世紀中葉のロシヤ における哲学的思汐

ベリンスキー・チエルヌイシエフスキーを
中心にして

上原ゼミナール

川 崎 隆 司

1. ベリンスキーの「現実との和解」の時代——
ロシヤ・インテリゲンチヤにおけるヘーゲル哲学の影響
2. ベリンスキーに於ける「否定の理念」の把握——
ロシヤに於るヘーゲル左派の誕生。
3. 40年代の社会思汐とベリンスキーの批評活動の一断面。

4. チェルヌイシエフスキーにおけるフオイエルバツハ的唯物論哲学の成立——唯物論美学
5. チェルヌイシエフスキーの唯物論哲学の構造——人間学的原理。

ロシア文学史における

チェルヌイシエフスキー

金子ゼミナール

直 野 敦

1. その世界観——その哲学。その社会、政治、経済観
2. その文学的諸労作——ロシア文学史に関する。美学文学理論に関する。
3. その後年

【要 旨】

どの世紀にも、何かその世紀にとつて決定的な意味をもつ、歴史的転換点とも呼ばれる時期があるように、私には思われます。18世紀にとつての1789年、20世紀にとつての1917年がそういつたものではないでしょうか。そして、19世紀にとつては、48～9年が、それにあたると思われます。1848～9年の諸事件の歴史的意味は、市民社会内部の階級対立が、はじめて公然と爆発したこと、そして、この社会的危機のなかから、マルクス・エンゲルス の努力によつて科学的社会主義理論が確立されたことにある、と考えられます。

このマルクス主義の成立へとみちびいた同じ危機が東ヨーロッパの後進国であるロシアでは、ペリンスキー、ゲルツエンから、チェルヌイシエフスキー、ドブロリユーボフにいたる革命的民主主義思想の形成へとみちびいた。ロシアをふくめた東ヨーロッパの諸国では、ブルジョア革命が、当面の目標となつていたのであるけれども、このブルジョア革命を志向する解放運動が市民社会にたいする批判とむすびついて、急進的な民主主義的イデオロギー下からの農民革命を意図する社会主義思想として、理論的に表現されるに至つた——これが革命的民主主義に対する、私自身の大きつばな考えです。

ロシア文学史や思想史の上で、60年代と呼ばれる時期（人によつて違います

が大体1856—64)は、この革命的民主主義をその精神的支柱とする、ロシアの解放運動が1861年の農奴解放をめぐる社会的激動のなかで、急激に進展した時期です。

しかも、ロシアの革命的民主主義思想は、文学の分野で、もつとも深く、またひろく展開されたことに、その根本的特徴のひとつがあります。わたしが、チエルヌイシエフスキーを文学史に即して考えようとするのは、このような事情からもきていますが、もうひとつは、19世紀後半から、20世紀初頭にかけて、ロシア文学がヨーロッパ、ある場合には、日本を含めたアジアの文化に深い足跡を残すに至った原因が、60年代に於ける文学と民主主義的解放運動との結びつきに潜んでいる、と考えるからです。

19世紀の世界文学に於る二大高峰、トルストイとドストエフスキーが作家的活動を始めた時代が革命的民主主義思想の形成の時期と一致していることは、その意味からも偶然ではないと思います。

こういつた考えから、私はチエルヌイシエフスキーの著作をひもどくことによつて、60年代の文学と革命的民主主義思想のつながりを究明しようと思つたのですが、この課題をきわめて不十分にしか果せませんでした。

晩年のハインリッヒ・ハイネ

大畑ゼミナール

宮野悦義

【要 旨】

1848年2月革命を契機として行われたと言われる所謂「改宗」„Bekehrung”の問題を中心に彼の晩年を考察した

- 1、「褥の墓穴」と称せられる彼の晩年の生活、——「改宗」の舞台として。
- 2、「改宗」の実体、一果して単なる直線的な「改宗」であつたか。
- 3、晩年の詩について、—(2)を具体的な作品から検討、
- 4、ハイネの「詩と現実」—彼の矛盾・動搖の因として、
- 5、彼の晩年の著述の簡単な紹介（作品年表として）

ソヴェト国民経済の再生産

野々村ゼミナール

藤 田 整

- 1、社会主義経済の発展
- 2、再生産の構造
- 3、国民所得
- 4、財政と金融
- 5、経済の計画化

【要 旨】

ソヴェト国民経済の再生産過程を、現物と貨幣の二面から、マクロとミクロの関連を失わずに、歴史的にとらえること。そうして、基本的な諸事実、諸概念の理解にもとづいて、計画論の方向に研究を発展させること。

チュルゴーの歴史的思惟の構造

——初期の諸論文を中心として——

上原ゼミナール

渡 辺 恭 彦

- 1、チュルゴー研究について
- 2、チュルゴーの歴史的思惟の構造
 - (1) 彼を歴史の研究に向はしめたものは何か
彼の歴史思想はどのようなものであつたか
 - (2) 進歩の理念について—進歩のしない手
進歩の諸原因
 - (3) その歴史把握の方法的特色。その思想史的位置。
啓蒙主義的歴史思惟の現代的意義

【今後の目標】

従来のチュルゴー研究の歴史的研究を通じて夫々の研究者及び夫々の問題状況を探る。